
クリスマス・イブの日に

ポジティブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマス・イブの日に

【Nコード】

N2223B

【作者名】

ポジティブ

【あらすじ】

学校の終業式が終わり、もう少しでクリスマスという時、元太、歩美、光彦、コナン、灰原はクリスマス計画を立てている。そこへ急に服部達が大阪からやってきてコナン達は急遽、蘭達のパーティーの方へ参加する事となった。そこで待ち受けていた災難とは・・・

1・学校帰り

12月23日。この日1日中、雪が降っていた。

2学期、終業式が終了し、いつものように5人が並んで歩いて家に帰っていた。つといても歩美、元太、光彦の3人が前ではしゃぎ、その後ろでコナン、灰原が話していた。

歩美、元太、光彦は何かを話しているようだ。

そしてその話が終わったと思うと歩美は後ろを振り返り、コナンに話しかけた。

「ねえコナン君。明日って何か予定ある？」

歩美は笑顔でコナンに尋ねた。

「いや。特にないけど。」

そして歩美は灰原の方にも顔を向け、灰原にも尋ねた。

「哀ちゃんは？」

そう言っただけ歩美は灰原の答えを待っていた。

「私も特に予定はないわ。」

歩美はコナン、灰原の予定が何もないことを知り、うれしそうに笑顔で二人に次の言葉を言った。

「ねえ、だったらみんなでどこかに集まってパーティーやらない？」

明日は年に一度しかないクリスマス・イブなんだもん。」

「いいわよ。」

歩美は灰原にOKの返事をもらい、さらに満面の笑顔になった。

「やったあ〜。コナン君もいいよね。」

そう言っただけ歩美はもう一度コナンの方を向いた。

「ん〜・・・。」

コナンは少し考えるように言った。

「何だおめえー、せっかく歩美が誘ってるのに、それを断る気か？」

元太は会話に割って入り、コナンの方を見ながら言った。光彦もコナンの方を向き、元太に続いて言った。

「そうですね。それともその日、何か予定でもあるんですか？」
元太も光彦もコナンが渋っているのを不服そうに言った。

「い、いや。別に何もねーけど……。」
コナンのその言葉を聞き、歩美はコナンに断られないようすぐに言った。

「じゃー決まりね。その日、博士の家に集まって皆でパーティーね。」

コナンが渋った言い方をした時に少し悲しそうな顔をしていた歩美は、コナンの予定がなく、パーティーに参加することになると笑顔になった。

「お、おい。俺はまだ参加するなんて一言も言っただろ。」
そう言っただけでコナンは歩美の方を向いた。が、光彦の発言によって遮られた。

「何ですか、コナン君。何か文句でもあるんですか。」
光彦はコナンを睨むような顔をして言った。

「ね、ねーけど。」
コナンの否定した言葉を聞いた後、元太が、コナンが次の言葉を言う前にすぐに言った。

「じゃー明日、おめえも絶対に博士の家に来るんだぞ。」
コナンは皆がパーティーの話をしている間に、それについて疑問に思っていることを3人に尋ねた。

「でも、準備とかはどうすんだ？明日だろ？」
しかしもうそれは後の祭りだった。3人ははしゃぎながらすでに前の方に行ってしまったのだ。

「ったく。」
それを聞いていた灰原は、コナンの隣でクスクス笑った。

「んだよ、笑いやがって。」
コナンは不機嫌な顔をしながら灰原の方をみた。

「その様子だと明日、彼女と一緒にクリスマス・イブを過ごすそう。だなんて思っていたのかしら、探偵さん。」

しゃべり終わると同時に、灰原はコナンの方に顔を向けた。

「んあ？」

「どうやらその様子だと凶星のようね。どうするの？あの子達とパーティーすると、彼女と一緒に過ごせなくなるわよ。」

灰原がそう言うと、コナンは手を頭の後ろに置き、蘭のことを言う時は遠くの方を見ながら言った。

「分かんねー。でもとりあえずパーティーには行かなきゃなんねーだろーな。行かねえとあいつら、後でうるせえしな。それにこんな格好で蘭の前に現れても、蘭は俺が工藤新一ってことが分かんねえから意味ねえしな。」

コナンはきつぱりと言った。

「そうね。」

灰原は「ごめんなさい」という気持ちも含めてコナンにそう言った。

「それより博士、あいつらが明日博士ん家でパーティーすること、知ってるのか？」

コナンは気分を変えて、パーティーのことで気になっていたことを灰原の方を向きながら聞いてみた。灰原は少し考えてから答えた。

「多分知らないと思うわ。あの子達の様子からすると、さつき決めたんじゃないかしら。それに明日のこと、今朝、博士一言も言っていなかったわよ。」

コナンは灰原が答える前に考えていた自分の意見と同じだったので、灰原に同意した。

「だろうな。それに、パーティーのための食べ物とかも全く揃えてねえんだろ。どうすんだ？」

コナンはジト目で言った。コナンは「いつものことだ」と思いながらもパーティーのことを灰原に話していた。

「そうね。まだ全く決めてないだろうから早急に決めないといけないわね。」

それにコナンが同意した。

「だよな。じゃーこれから博士ん家行って決めるとすっか。このこ

と、博士にも言わなきゃなんねえしな。」

「そうね。」

灰原は短く言った。

歩美、元太、光彦との分かれ道に差し掛かった時、コナンは挨拶をして自分の家の方へ歩いて行く3人を止め、パーティーの準備のことを聞いてみた。

「あつ、そういえばまだ何も決めていませんでしたね。」

光彦はすっかり忘れていた。っていう感じのしゃべり方をした。

「あつ、そう言えばこのこと、まだ博士に言っただけだったね。」

歩美がすっかり忘れていたことを付け加えた。

(やっぱり)

コナンは思っていたことが本当だったと思いながらジト目になった。

その時、灰原もコナンと同じように思っていた。

「そういえばそうだな。じゃーこれから博士ん家行って話し合うとすっか。」

元太は仕切って博士の家で話し合うことを提案した。

「うん。」

「そうですね。」

歩美と光彦は元太に同意した。こうして3人は、張り切って博士の家の方へと向かって歩き出した。その後ろをコナンと灰原がついて行った。

1・学校帰り（後書き）

こんにちは。

久々の投稿になります、ポジティブです。

どれぐらい長い小説になるか分かりませんが、最後までみていただけたらうれしいです。

2. パーティー計画

阿笠邸

「ピンポーン。」

ドアのベルが鳴り、博士は誰だろう？と思いつながら玄関へ行き、ドアを開けた。そこには歩美、光彦、元太、コナン、灰原の5人がいた。歩美、光彦、元太の3人はドアを開けられると「にーっ」と笑顔で博士の方を見た。

「お邪魔します。」

そう言つて3人は博士の家の中へと入つて行つた。3人が入つて行つた後、コナンと灰原は博士と一緒に中に入つて行つた。

「今日は何事じゃ？」

いつもなら「遊びにきたぜー」と言つてから中に入つて行く皆が、今日は「お邪魔します」の一言だったため、博士はどうしたんだろうと思ひ、歩きながらコナンと灰原に尋ねた。

「明日のことだよ。」

コナンはそう言いながらジト目になった。

「おおー、明日のことか。こりゃあ奇遇じゃのう。ほれ明日、クリスマス・イブじゃろ？じゃから明日、皆でわしの家でパーティーをしようと思つていたんじゃが今日の朝、学校の帰りに皆にわしの家へ寄つてもらつたことを哀君に頼み忘れたんじゃ。じゃからどうしようかと思つていた所なんじゃ。」

博士は笑顔で言い、皆の方へと歩いて行つた。

「おお皆、よく来たな。しかし偶然じゃのう。みんなも明日のパーティーのことかわしの家に来たんじゃろ？わしも明日、皆とパーティーをしようと考えていたんじゃ。ちょうどよかつたわい。」

この言葉に皆は驚きを隠せなかった。なぜかという皆はまだ、博士にパーティーのことを伝えていないからだ。博士が皆の所に来るから博士に伝えようとしていた事を先に言われたのだ。

「ど、どうしてボク達が博士の家に来た理由が分かったんですか？」
光彦は驚きながら博士に質問した。

「それはじゃな、さつきしん・・・じゃなくてコナン君が教えてくれたんじゃない。」

その言葉にみんな、安らぎを取り戻した。

「なんだあ、コナンのやつが言ったのかよ。せつかく俺たちが博士に言おうとしてたのによあ。」

元太は安らぎを取り戻したとはいえ、コナンに先に言われたのが不服だったらしく、少し怒りっぽい言い方をした。

「でもよかつたじゃない。博士が魔法か何かで私たちの話を聞いていたんじゃないから。」

歩美は笑顔で元太に言った。

(あ、歩美ちゃん、魔法つて例えにも度がいきすぎだぜ。)

ちょうど皆の所についた時、歩美の言葉を聞いたコナンはそう思った。

元太がコナン、灰原が自分たちの所に来たのに気づき、元太がちょっと怒ったような言い方で言った。

「おいコナン、明日のパーティーのこと、博士に言ったのかよ。」

元太はいかにも自分が博士に言いたかったような言い方だった。

「ああ。だって博士、お前らがいつもと違っつて不思議がつてたぜ。」

コナンは呆れた顔をしながら元太に言った。

「私達、そんなにもと違つてたかなあ？」

コナンの言葉に対し、歩美は不思議そうな顔をして言った。

「んーボク達、いつもと同じだったような気がしますが、どこが違つてたんですか、博士。」

光彦も歩美と同じ疑問を持ったらしく、光彦は博士に尋ねた。

「まー、そんなに堅くならんと。それよりほれ、明日のことを早速決めようかのお。」

博士は話題を明日のことに逸らし、話し合いを始めた。

コナン達の話し合いは結構長引いた。元太達がいろいろな意見を言うので意見がなかなかまとまらなかった。だけどコナンがそれを無理矢理丸め込め、話し合いは無事？終わったのだ。

時刻は4時頃になった。

コナンは歩美、元太、光彦、哀と別れ、探偵事務所の前まで帰ってきて、階段を上っていた。コナンが探偵事務所のドアを開けようとした時、中から聞き覚えのある声が聞こえた。コナンはまさかと思いい、ドアを少し開けた。

(やっぱり)

コナンの予想は的中した。そう思いながらコナンは、自分が通れるぐらいドアをあけ、挨拶しながら中に入って行った。

「ただいまぁ。」

蘭はコナンに気づき、笑顔で話しかけた。

「あつ、コナン君お帰り。遅かったね。ちょうどさつき服部君達がここに来たのよ。明日から学校が休みって事で今日から数日、ここに泊まって行くって。」

「よおボウズ、待つとつたで。」

コナンは服部のこの言葉を無視して和葉に挨拶した。

「こんにちは、和葉姉ちゃん。ゆっくりしていつてね。」

コナンは笑顔で和葉に言った。

「ありがとう、コナン君。小学生なのに挨拶できてええ子やね。」

服部はコナンを睨みつけながらこう言った。

「どこがええ子やこんな奴。憎たらしゆうてかなわんわ。」

コナンと和葉は服部を睨み、服部はコナンをジト目で見た。

「どこが憎たらしいんや。挨拶ができるんやでええ子やん。」

和葉は服部に対抗した。

「挨拶出来ても中身は憎たらしい奴やで。」

服部は和葉の方を向き、お互いに睨み合った。その時、皆にバレないようにコナンは服部の足を思いつき蹴った。

「いつ!？」

服部がコナンの方を見、お互いに睨み合った。

(なにさらすんじゃボケ。おもいつきり蹴りよって。)

服部は声を出して言いたかったが、皆が居るので言えなかった。

その時蘭がしゃべった。蘭の一言でこの睨み合いはあっという間に終わった。

「あつ、いつけない。夕飯の買い物してこなきゃ。」

本当は夕飯の材料があったが、服部と和葉が突然来たので材料を買いに行かないといけなくなった。

「あつ、それならあたしも手伝う。」

そういつて和葉は蘭の後に付いて行った。

「ありがとう。」

和葉にお礼を言い、蘭はコナンと服部の方を向いた。

「じゃーコナン君、服部君、お留守番お願いね。」

蘭は笑顔でそう言った。

「おう、まかとき。」

「いつてらっしゃい。」

服部とコナンは言った。

「いつてきます。」

そういつて蘭と和葉は買い物へ出かけて行った。

ドアが閉まって二人が階段を下りて行く音を確認すると、服部はコナンに言った。

「なんなんやさっきのは。せつかく俺が挨拶したのに無視しよる。」

そう言いながら服部はコナンを睨んだ。

「こつちに来る前に連絡ぐらいしろっていつも言ってるだろ。」

そういつてコナンはまた服部を睨み始めた。

「まー、そんな堅いこというなや、なつ。それより明日、あの姉ちやんが杯戸シテイホテルでパーティーがあるって言ってたで。お前も誘つつもりらしいで。」

服部は話をあつさり流すと明日の話を持ち出した。

「俺。パス。明日は博士達と子供達皆でパーティーしようって言うんだ。」

そう言つてコナンは服部の誘いを断つた。

「ええやん、そんなもん。それよりこつちのパーティーの方が楽しそうやで。」

服部は「子供達のパーティーなんかほつとけよ」とでも言いたそうなの口調で言つた。

「そんなもんつてお前、少しは口を慎めよ。それにあいつらの方が先約なんだぞ。」

そう言いながらコナンは少し驚きながら服部を見た。「探偵が子供をそんな扱いしてもいいのか？」とでも言いたそうに。

「それやったらそいつらもこつちのパーティーに誘つたらいいやんけ。」

服部はあつさりと言つた。

「勝手にパーティーに行つてもいいのか？」

コナンのこの質問に、服部はあつさりと返答した。

「それやったら姉ちゃんに聞いてみたらいいやんけ。なんかそのパーティー、姉ちゃんの友達が開くパーティーらしいで、聞いたらオケーしてくれるんとちゃうか。」

(ああ。園子の所か。)

ここまで聞けばコナンは誰のパーティーのことを言っていたのか見当がついた。コナンがそう思っている間に服部は携帯を片手にしていた。そしてどこかに電話をた。どうやら服部は和葉に電話をし、蘭に子供達も行つてもいいかを聞いてもらっているようだ。しばらくして服部が電話を切り、ニヤツと笑いながらコナンの方を向いた。「子供達も行つてもいいらしいで。」

服部は笑顔でコナンの方を向いてそう言つた。

「そっかあ。じゃあいつらに連絡すつか。」

コナンはあつさりと言つた。

「おう。」

服部の声を聞く前にコナンは受話器を持って皆と連絡をとり始めた。

しばらくしてコナンは皆に連絡を終え、服部にこう話しかけた。

「みんな、明日行けるらしいぜ。よかったなあ、お前の願いがかなって。」

そう言ってコナンはジト目で服部を見た。

「そっちなあ。皆で行った方がパーティーも盛り上がって楽しくなるやろっしなあ。」

服部はコナンと一緒にパーティーに行けるのがよっぽどうれしいのか、満面の笑顔でそう言った。

3・翌日

翌日、雪は積もっていた。

皆が探偵事務所に集まって来る時間になった。

「こんにちは。」

歩美、元太、光彦はそこにいた蘭に元気よく挨拶した。

「あっ、みんなこんにちは。お父さんと和葉ちゃんが準備にまだ少し時間がかかるみたいだからお茶とお菓子、持ってきてあげるね。」

そう言つて蘭は鼻歌混じりに楽しそうに上に上がって行った。その時、蘭と入れ違いにコナンと服部が下に降りてきた。

「あっ、コナン君。」

とつさに歩美がコナンを見て言った。

「おう。」

コナンも歩美に言った。

「おめえ、降りてくるの遅かったなあ。ひよつとして寝坊してさっきまで寝てたんかあ？」

元太はコナンをジト目で見ながら言った。

「ちげえよ。おめえらの声が聞こえてきたから降りてきたんだよ。」

それに今、何時だと思つてんだ？こんな時間、誰でもとつくに起きてる時間だろ。」

そう。今の時刻は12時なのだ。園子のパーティーが始まるのが3時で、もし誰かが遅れても時間に間に合うように余裕を持って3時間前の12時に探偵事務所に集まる事になっていた。ちょうどコナンと元太がこのような会話をしていた時、皆は服部の方に目がいき、挨拶をした。

「こんにちは。」

皆は大きい声で挨拶をした。

「おう。皆元気がええなあ。誰かと違つて憎たらしゆうないわ。」

服部は子供達に笑顔で、コナンの事を言うときはコナンをジト目で

見ながらそう言った。

（んだよ。昨日はこいつらのパーティーをバカにしてたくせに。）
そう思いながらコナンは服部を睨み、思いつき服部の足を蹴った。
「いつ!？」

服部の目が飛び出そうなほど一瞬大きくなった。それから服部はコナンを睨み、お互い睨み合った。

（こいつまた俺の足を蹴りよった。）

睨み合いが続いている中、その横でクスツと笑い声が聞こえた。その笑い声が聞こえた途端、コナンと服部は睨み合いをやめ、二人の視線は笑い声が聞こえた方へといった。その人は灰原だった。

「は、灰原。いつの間にここに？」

コナンは灰原がいつ二人の近くに来ていたのか全く気づかなかったので、驚いた顔で灰原にそう尋ねた。

「あら。私はさつきからずっとここに居たわよ。」

いつもの冷静な口調で言った。

上から蘭が人数分のお茶とお菓子を持って降りてきた。

「みんな、お茶とお菓子持ってきたわよ。」

蘭は笑顔で皆にそう言い、お茶とお菓子を皆に渡した。

「わーい。ありがとう。」

「ありがとう。」

「ありがとうございます。」

歩美、元太、光彦は礼儀よくお礼を言ってお茶とお菓子を受け取った。

コナン、灰原、服部もお礼を言ってお茶とお菓子を受け取った。こうしてしばらくの間、和葉と小五郎が降りてくるまでの時間、皆で話をしていた。

「これから行くパーティー、どんな感じだと思いますか？」

光彦は皆に聞いてみた。

「皆白いきれいなドレスを着ていて、二人ペアを作って踊っている

ようなパーティーかなあ？」

歩美はこれから行くパーティーを想像しながら言った。

「俺はうな重が沢山食えるようなパーティーだったらいいなあ。」

元太の発言にコナンは、「また食べ物の事を言ってる」って思い、呆れた顔で元太を見た。一方元太は、うな重が食べれたらいいなと思ひ、笑顔で想像しながら言った。

「あはは。元太君、それは多分このパーティーにはないと思いますよ。そのかわり、他のいろいろな食べ物がどっさり置いてあると思いますよ。」

光彦は元太の発言に笑いながら元太を見て、自分の知っているパーティーの様子を言った。

「あはは、元太君ったらうな重の事ばかりなんだから。」

歩美も笑いながら元太の方を見てそう言った。

「ちえっ、何だよ。二人して俺のことを笑いやがって。コナンもうな重あると思わねえか？」

皆が元太のことを笑うので、元太は不服そうに言いながらコナンには賛成してもらおうと思ひ、コナンに聞いた。

「わりいけど俺も光彦の意見に賛成だな。」

そう言つてコナンも元太の意見をあっさり否定した。コナンにも自分の意見を否定され、元太はますます不機嫌になった。

「みんな、これからのパーティーにいろいろな想像があるね。」

蘭は、子供達は想像力が豊かだなと思ひながら子供達の会話を聞いていた。

「そやな。」

服部は蘭の意見に賛成した。

「いろいろな想像があつて、楽しそうでいいな。」

大きいパーティーは今日、これから行くのが初めてなのかなと思ひながら蘭は言葉を付け加えた。

（ははは。元太の場合は何かあるとすぐうな重が出てくるけどな。）
コナンはそう思ひながらジト目で子供達の方を見、蘭、服部の二人

の会話を近くで聞いていた。
こんな会話をしているうちに数分経った。

そして話し始めてから10分ぐらいたった。

元太が「あのおっさん何やってんだ？おせえぞ。」とちよつと怒り始めた時、上からバタバタと音を立てながら和葉が下に降りてきた。

「お待たせ。みんな、待たせちゃってごめんな。」

和葉は下に降りてきてすぐ、皆に謝った。

「なんや和葉、よーそんな準備に時間掛かったなあ。」

服部はジト目で和葉の方を向きながら言った。

「しゃーないやん。準備って時間掛かるもんなんやで。それよりおつちゃんは？」

和葉は小五郎のことを探しながらどこにいるのかを聞いた。

「お父さんならもうすぐ下に降りてくると思うよ。」

蘭がそう言ったすぐ後、小五郎が下に降りてきた。

「おう、みんな集まったか。じゃー出発だ。」

そう言つて皆で外に出た。

この日は雪が積もっている為、パーティー会場の杯戸シティホテルへは電車で行くことになった。

3・翌日（後書き）

こんにちは、ポジティブです。
感想の方、何かありましたらお願いします。

4・杯戸シティホテルの目の前で

今日は雪が積もっている為、駅まで歩いて行くのが一苦労だった。歩いていくのにいつもの倍はかかった。何とか駅に着いて電車に乗り、杯戸駅まで着いた。駅から歩いて10分ぐらいの所に杯戸シティホテルはあった。蘭、和葉を先頭にして次に歩美、光彦、元太、その後ろに服部、コナン、灰原のように並んで歩いていて。小五郎はというと、家に忘れ物をしたのに電車の中で気づき、小五郎だけは家に戻った。

電車の中。

「あつ、そう言えばお父さん、チケットちゃんと持ってきた？」

蘭はチケットの事を、家を出る前に小五郎に確認するのを忘れ、今聞いた。

「あん？パーティーに行くのにチケットなんかいるのかあ？」

小五郎はどうでもいいかのような言い方で返した。

「昨日の夜言っただじゃない。招待された人の中で、パーティーの時に演説をしてもらう人にはチケットを渡していて、入り口で目印になる物を何かもらって。」

蘭は呆れた顔をして小五郎に昨夜説明したことをもう一度説明した。
「あー、そういえば昨日の夜、お前がそう言うようなことを言ってたなあ。」

小五郎は思い出したようだ。

「もうお父さんったら。しっかりしてよね。ところで持ってきたの？」

蘭はまだ呆れていた。

「いや。すっかり忘れてたぜ。だけど俺なら有名だからチケットなくても大丈夫じゃねえか。」

小五郎はチケットがなくても大丈夫だと思い、余裕をかました。

「だめだよ。今日は人がいっぱい来るらしくて、人を雇っているらしいんだから。その人が、お父さんが演説をするなんて分からないでしょ。」

そう蘭は付け加えた。

「そっかあ。じゃー家に取りに戻るしかねえのか。しゃーねえ、俺は取りに戻るからお前らは先に行っとけ。」

小五郎は家に取りに戻るのが面倒だったが戻ろうと決め、こう言った。

「なんやおっさん、チケット忘れたんか。」

服部は蘭、小五郎の会話に首を突っ込んだ。

「うるせえ。」

服部にチケットを忘れたことを言われ、小五郎は少し怒った。

(ははは。おっちゃんのやりそうなことだな。)

そうコナンは思い、小五郎に呆れていた。

もう少しで次の駅に着きそうな時、小五郎は蘭に言った。

「そっぴや蘭、お前杯戸シティホテルまでの道、分かるか？」

「うん。もし分からなくなったらコナン君もいるから大丈夫だよ。そう言つて蘭はコナンの方を笑顔で見た。」

「えっ？」

コナンは、蘭が自分の名前を出すとは思わなかったので驚いた。

「コナン君も杯戸シティホテルまでの道、分かるよね？」

蘭はコナンに尋ねた。

「うん。だから心配しなくても大丈夫だよ、おじさん。」

コナンは笑顔でいつもの子供の声で小五郎に言った。

小五郎は(本当に大丈夫か?)と思っただが、

「おっ。」

と一言短く答え、次の駅で降りて行った。

皆、わいわいと話しながら杯戸シティホテルまでの道のりを歩いていた。あと少しで杯戸シティホテルという所まで来ていた。そこまで来て突然、灰原の様子が急変した。灰原は何かの気配を感じたようだ。灰原は服についているフードを被った。灰原と一緒に並んでいたコナンは、灰原の様子が急変したのを悟った。灰原の様子を見て、灰原が黒の組織に怯えていた時と同じ怯えかただったのでこれはひよっと思ひ、コナンはもつと灰原の近くまで近寄った。そして、誰にも聞かれないように灰原に声をかけた。

「灰原、大丈夫か？」

コナンは黒の組織がこの近くにいて、そのせいで灰原が怯えているのだと予想がついていたけどあえてこう聞いた。

「彼らが多分この近くに居るわ。」

灰原は下を向いたまま声を殺してコナンに言った。

「か、彼らつてまさか!？」

コナンはやっぱりっと思つたが、本当に自分が考えていたことと当たっていたので驚きを隠せないでいた。

「ええ。そのまさかよ。」

そう最後に言つて灰原は沈黙を作った。

このとき、灰原がフードを被つて下を向いて怯えているのに気づいた人がもう一人いた。それは蘭だった。蘭は一番前で和葉と一緒に歩いていたのにどうして蘭が灰原の様子が分かったかというところ、皆がちゃんとしてきているかを確認するために後ろを振り返ったからだった。親から子供達を預かっているの、子供達に何かあつては困るのだ。灰原のこの状態に気づき、蘭は心配して灰原の傍まで行った。コナン達は皆から少し距離を置いて歩いていたのだ。蘭が

後ろを振り返って灰原の所へ行こうとしたとき、和葉も後ろを向き、灰原の様子に気づいた。そして、和葉も心配して蘭について灰原の方へ行つた。蘭、和葉が灰原の方に行くのを見て、歩美、元太、光彦も灰原がいつもと様子が違うのに気が付いた。蘭が灰原の近くまで来た。灰原は足を休めずに歩き続けているので、蘭、和葉は灰原に合わせて同じテンポで歩きながら灰原に声をかけた。

「哀ちゃん、大丈夫??」

がしかし、灰原は蘭に返事を返そうとしない。コナンは答ええない灰原のかわりに返事を返した。

「震えているからきつと寒いんじゃないかなあ。だけど手袋をしてるからきつと大丈夫だと思うよ。」

コナンはわざと明るく、笑顔で振る舞った。

「そっかあ。後もうちよつとで杯戸シティホテルだからね。」

そう言つて蘭は灰原を元気づけようとした。がしかし、灰原は蘭に何も言おうとしないで、ただただ下を向いて歩いているだけだった。「体調が悪いんだつたら遠慮しずいいつでもあたらに言つてーな。」

和葉も心配して灰原に声をかけたが、やはり灰原の返事は返ってこなかった。なのでまたコナンがかわりに答えた。

「もし様子が変だつたら、その時は和葉姉ちゃん達に伝えるから大丈夫だよ。」

コナンはまた笑顔でそう言った。

「じゃあコナン君、哀ちゃんのことお願いね。」

「うん。」

コナンの返事を聞き、灰原の事が気になっていた二人は一緒に前の方へと歩き出した。二人が前の方に行つた後、今度はさっきの蘭、和葉達の会話を聞いて心配していた歩美、元太、光彦が灰原に声をかけた。

「哀ちゃん本当に大丈夫?」

最初に灰原に声をかけたのは歩美だった。灰原は、歩美の言葉にも

返事を返そうとしない。歩美に続いて元太、光彦も灰原に声をかけた。

「大丈夫かあ、おめえ。下ばかり見ててもつまんねえぞ。俺たちと一緒に話してた方が楽しいぜ。」

「そうですね、灰原さん。もし寒いんでしたらボク達と一緒に話した方が身体が温まるかも知れませんかよ。」

元太、光彦も灰原を元気づけようと声をかけたのに、当の本人は足を動かす以外何もしようとしなかった。歩美、元太、光彦はますます灰原の事が心配になった。コナンは灰原のその態度の理由に気づいていた。その理由とは、灰原が子供達と話し、関係を持っていると知れたら組織の人達に見られた時、子供達も消されかねないからだ。そこでまたコナンが灰原のかわりに子供達に言った。

「きつと何か考え事してるだろうからそつとしといてあげて。」

きつとこれで理解してくれるだろうとコナンは思った。

「そつかあ。考え事してるんだったら私達が話しかけても聞こえてないかもね。」

そついつて歩美は納得してくれた。

「そうですね。考え事してたら周りが全然見えないって言いますからね。」

そついつて光彦も納得してくれた。

「そうだな。じゃーそつとしといてやろうぜ。」

元太も納得してくれた。皆が納得してくれた所で皆は前の方の、蘭達のすぐ後ろの方まで歩いて行った。

皆が灰原達の周りから離れて行った後、服部はコナンに聞いた。

「この姉ちゃん、ほんまに大丈夫なんか？」

「ああ。今の所はな。」

今、組織のことを言えばどこかで組織に聞かれてしまう可能性があると思う、コナンは服部には家に帰ってから今の事を言おうと思っただ。(もしバレずにこのまま時が過ぎればの話だが。)なのでコナンはわざとこんな返事をした。

「い、今の所ってなんなんや。後では大丈夫やないって言うんか？」
服部は何かあると思い、コナンの返事を期待してもう一度聞いてみた。だがコナンの返事は、

「まあ、詳しいことは家に帰ってから話すよ。」
だった。服部は（はっ？）と思ったが、ここで言えない理由が何かあるんだろうなと思い。あえてそれ以上は聞かない事にした。

杯戸シティホテルの所まで来て、後少しで杯戸シティホテルの玄関に着くっていう時、嫌な音が聞こえた。

パシユッ

5・ジンとの対面

パシユツ。

その音の原因の物は灰原の右腕をかすめていた。それは銃弾だった。灰原は歩くのを止め、少しの間動けずにいた。

コナンはその銃弾を撃った人の犯人に目星がついた。服部は、灰原が打たれたのに気づいていた。そして、歩きを止めて後ろを振り返り、文句の一つや二つを言おうとした。だが、コナンは後ろを振り返ろうとしている服部を止め、灰原を撃った相手に、灰原と関係があるとバレないように普通に歩きながら自分の近くに顔を持ってこさせようとした。灰原が何かを感じ、フードを被って怯えている時に少し、コナン、服部と感覚を開けて歩いていたので灰原とは関係を全く持っていないと思ったのか、コナンと服部の方へは銃弾を飛ばしてこなかった。そしてコナンは小声で服部に言った。

「おい、後ろを振り返るなよ。」

コナンは灰原が撃たれてすぐ服部に言った。コナンは顔も声も真剣そのものだった。服部は後ろを振り返ろうとしたのを止め、コナンの方に向いた。服部がコナンの方を向いた時、コナンの顔は灰原の様子が急変した理由を家で教えてくれるって言うていたときの顔よりもますます真剣な表情になっていた。服部は、かろうじてコナンがなんて言うていたのかが聞き取れたようだ。

（さっきよりも真剣な顔しとるっちゆう事は、この姉ちゃんが撃たれたのは何か深い意味があるんやな、きつと。）

っと思いなから

「何でや？」

っつと服部はコナンに尋ねた。

何か深い意味があると感づいていても、服部は今の状況がいまいち飲み込めていないらしく、頭には？マークが沢山付いていた。服

部は今の状況がいまいち飲み込めていないため、大きい声でコナンに聞き返した。

「しーっ。この状況からすると、後ろには多分例の奴らがいるんだ。」

灰原を撃った相手にこの会話を聞かれたら、コナン、服部も灰原に関わっているということがバレてしまったため、コナンはさっきよりも声を殺して言った。そして、灰原の撃った相手と灰原（もし灰原が後ろを振り返っていれば）の会話を聞いて、少しでも情報をつかもうとしていた。だけど不運にも服部と話している上に、バレないように杯土シティホテルの方へ歩き続けているので灰原を撃った相手から遠ざかっていき、話している内容が全然聞き取れなかった。

「れ、例の奴らってまさか。」

服部は驚いた。コナンが声を殺しているので自分も声を殺そうとしたが、あまりの事で驚き、コナンよりも少し声が大きくなった。

服部の声が少し大きかったため、灰原を撃った相手に服部の声が聞こえたかどうかを心配した。幸運にも、少したっても撃たれなかったので聞かれていなかったんだと思い、少し安心した。そして、服部に返事をした。

「ああ。そのまさかだ。だから振り返るなよ。」

コナンはやっと見つけたという嬉しさと、慎重に接しないといけなという二つの思いからニツと笑い、なおかつ、真剣な表情だった。

「おっ。」

服部は、コナンを小さくした組織がどういう組織なのかをコナンから少し聞いていて、どんなに手強い組織なのかを知っていたので、服部もこの時ばかりは真剣な表情になった。

「それで服部に頼みがあるんだけど、皆が後ろを振り向かないように杯土シティホテルまで連れて行って欲しいんだ。」

コナンは慎重だった。頼みがあるって聞こえたので服部はさっきよりも腰を低くして、さっきよりもコナンの言っている事が聞き取りやすいようにしていた。

「お前はどないするんや？」

服部は、コナンがどうするのかだいたい予想はついていたがあえてこう聞いた。

「俺は灰原を助けに行く。だから蘭達を頼む。もし蘭達に俺たちの事を聞かれたら適当にごまかしといてくれ。」

コナンは服部の質問にためらわずに答えた。コナンはさつきからまつすぐ、ずっと蘭達の方を見ていた。蘭達にコナン達の事がバレないように、そして、無事に戻って来れるのを願いつつ。

「分かった。ほな気いつけてな。」

服部はコナンから言われるだろうと思っていた事と同じだったので全く驚かずに言った。

「ああ。」

コナンは短く答えた。

「絶対に死ぬんやないで。あの姉ちゃんのためにも、必ず生きて帰ってこいよ。」

服部はいつも以上に真剣になって言った。もちろん顔も真剣そのものだった。

「ああ。」

コナンのその返事を聞き、低い姿勢で会話をしていた服部は身体を上上げた。そして、服部はそのまま歩き続け、コナンはその場で立ち止まった。そしてコナンは目で皆を見送った。

服部は皆に追いついた。今ここでコナンと灰原が一緒にいない事を皆に気づかれると、皆、後ろを向いてコナン達を探そうと思ってい、あえて皆の視界に入らないように服部は皆の後ろからついていった。そして蘭達は、コナン、灰原がいない事に気づかないまま杯戸シティホテルの中へと入っていった。

服部達が杯戸シティホテルの中に入って、コナンの視界から皆が消えた後、コナンは後ろを振り向いた。コナンが後ろを振り向いた時、灰原は既に後ろを振り向いていた。灰原の矢先にはコナンが想像していた人、つまりジンがいた。ジンは拳銃を灰原の方に向けて灰原

と向かい合い、何かを話していた。幸運にも、ジンは灰原の方を向いてそつちに気を取られているため、コナンが灰原の少し後ろにいる事に気づいていないみたいだった。なので、コナンは傍にある建物と建物の間にある細い路上に身を潜め、ジンの視界から見えないようにしていた。そこで、これからどうやって灰原を助けるかをしばらく考えていた。

6 ・その後の蘭達

一方蘭達は、杯戸シティホテルの中に入る一歩手前の所だった。そして、皆は暖かい杯戸シティホテルの中へと入っていった。

「やったあ。やっと暖かい所まできたあ。」

みんな、雪の降っている寒い中を10分かけて歩いて来たので、暖かい杯戸シティホテルの中に一番に入った蘭が第一声を言った。

「ほんとやね。あつ、あれ園子ちゃんとかやう？」

和葉はホテルの中に入っただけ、園子かな？と思った人物を見つけ、そっちの方を向いて蘭に言った。

「あつ、ほんとだー。園子お。」

蘭は和葉に園子を見つけてもらい、園子に声をかけた。ちょうど園子は人と話し終えたみたいで人が行った後、蘭の声を便りに皆を見つ、向いた。そして、手を振りながらみんなのほうへと走って来た。

「蘭。今ついたの？まだこんな時間よ。結構早くついたわね。」

園子は自分の手首についている時計を見て言った。

「うん。皆と少し早めに待ち合わせしてたの。だからちよつと早めに来ちゃった。」

蘭の発言が終わり、園子はあたりを見回した。そして、園子は小五郎がいらない事に気づき、蘭に聞いた。

「あれつ、おじさんは一緒に来てないの？」

園子は小五郎と一緒に来てないのに対して、いつもこういう行事には一緒に来るのに珍しいなあと言いたそうな言い方だった。

「あつ、お父さんなら途中で家に戻っちゃったわよ。何でもチケットを持ってくるの、忘れちゃったみたい。」

蘭は園子に言いながらも小五郎に呆れた。

「ははは。おじさんのしそうな事だよ。」

園子も小五郎に呆れ、苦笑した。

「ははは。」

蘭も 呆れて笑う事しか出来なかった。なので園子につられて蘭も苦笑した。

ここで園子は、蘭の後ろの子供達を見て、そこにコナン、灰原がない事に気づき、蘭に尋ねた。

「あれっ、蘭。あのがきんちよの姿が見えないけどおじさんについて家に戻っちゃったの？」

園子はいつも、どこにでもついてきそうなコナンがいないのにびっくりして、蘭に聞いた。

「えっ？コナン君、後ろにいない？」

蘭はコナンが後ろに当然いると思っていたので、園子に聞いてびっくりして蘭も後ろを振り返った。

「本当だ。あれっ？哀ちゃんもいない。どこ行っちゃったんだろう。」

蘭は急にコナン、灰原がいなくなったので心配そうな表情をした。

「ほんまや。どこ行ってしもたんやろ。ひょっとしてトイレとちゃうかなあ？」

そう言っつて和葉は蘭よりは心配していなかった。

「でも、トイレならあそこですから、もしトイレに行っただでしたらボク達が気づくはずですよ。ほら。」

蘭、園子、和葉の会話を聞いていた光彦は、トイレの方を指差しながら言っつた。

「コナン君と哀ちゃん、何も言わずにどこ行っちゃったんだろう。」

歩美もコナン、灰原がいない事に気づき、あたりをきよるきよると見回しながら心配そうに言っつた。

「ほんとだぜ。世話の焼けるやつだぜ。」

元太はあんまりコナン達を心配していなかった。

「ああ。そう言えばあの二人なら途中で駅まで戻ってっつたぞ。なんかあの姉ちゃんが電車の中に忘れ物したらしいで。それでボウズが姉ちゃんの付き添いとしてついてっつたぞ。」

服部はコナンと灰原の本当の理由がバレないよう何食わぬ顔で言った。

「なんだあ。それだったらそれで俺らに何か一言言えば俺たちもついてったのに。」

元太は少し怒ったような態度で言った。

「本当ですね。そしたらボク達もついていけたのに。」

光彦も元太の意見に賛成だった。

「だね。数人で行くよりも大人数で行く方が楽しいのにな。」

「そうですね。コナン君、また抜け駆けですね。彼の十八番ですね。」

光彦はそう言った。

「ああ。帰ってきたらコナンの奴にうな重何個もおごってもらうぜ。」

元太はうな重の事を言う時は楽しそうに、笑顔で言った。

「元太君、そこまでしたらコナン君がかわいそうだよ。」

「そうですね、元太君。コナン君も子供なんですからお金、あんまり持っていないと思いますし。」

光彦も歩美の意見に賛成した。そんな楽しそうな会話が子供達の中で飛び交っていた。その会話を聞いている皆も「子供達は元氣だねえ。」と話していた。だが、一人だけ表情が暗い人がいた。それは蘭だった。蘭は何かを感じたのか、コナン、灰原が無事に帰って来れるかを心配していた。

「私、ちよつとコナン君達見てくるね。雪も降ってるし、子供達二人だけだと何かに巻き込まれたら大変だし。」

そう言つて蘭は出口の方へ向かい、駅までコナン、灰原を追いかけに行こうとしていた。

「あつ、それなら俺が行ってくるで。」

蘭の発言に対し、服部は慌てて出口の方へ向かっている蘭を止めた。

「そうやそうや。こういうのは平次に行かせたらいいんやで、蘭ちやん。それに、あの子達が行くとき、傍に一緒におったのについていかんかったんは平次なんやから。」

和葉はいつもの口調で言った。

「そりやそうやな。ほな行ってくるな。」

この平次の言葉を聞いて和葉はびっくりした。

（あれっ？どうしたんやろ。いつもやったら何かゆってつかかってくるのに今日は何も突っかかってこおへんやん。）

和葉がびっくりしているのにも関わらず、平次は行こうと出口の方へと歩き出した。平次は外へ出る前に皆の方を振り向いた。

「お前、なんちゆう顔しとるんや。」

和葉は考える方に夢中になっていたせいか、変な顔をしていた。

「平次があまりにも素直やからやん。」

和葉は平次の声によって我に返り、さっきまで考えていたことを言った。

「はあ？いつもは素直やないゆうんか？」

平次は和葉に突っかかっていった。

「せやで。せやからあたしがいつも平次の為に大声出して訂正してやってるやん。」

平次の頭、おかしくなったんじゃないの？って言いたそうな顔をして和葉は言った。

「声大きなんはお前がごちゃごちゃゆってくるからやろ。」

服部は和葉に対抗していった。

「はあ？平次がいつつもわけ分からん事いうからやん。」

そっついながら和葉の声が少し大きくなった。

「それはお前がそう思ってるだけや。俺はわけ分からん事なんてこれっぽっちもゆってへんで。」

服部の声も和葉の声に負けず、大きくなってきた。

「何ゆうてんの。いつつもわけの分からん事ゆうてるやん。」

さっきの服部の声よりも大きくなった。

「やったら俺がいつわけの分からん事ゆうた？え？ゆうてみい。」
二人の声がどんどん大きくなっていき、周りの人たちの注目を集めてしまった。蘭はやれやれと思いつつも二人を止めに入った。
「二人ともこんなところで喧嘩はやめてよ。ここ、ホテルだよ。」
この蘭の声によって二人の喧嘩（言い合い）はそこで止まった。
「このアホなんかほっぽってさつさと中入ってこ。」
和葉はぷいっと向いて中の方へ入っていった。和葉を先頭にして、その後には皆もついていった。
「みんな、あんなアホの言う事なんか聞いたらあかんで。」
と捨て台詞をいい、服部は少し苛立たしいながらも外へ出て行った。

「あつ、それよりこれからあたし達はどこへ行ったらいいん？」
服部との怒りが収まってきているのか、和葉は普段の顔をして園子の方を向き、聞いた。

「あそこよ。あそこで受付してるから。」
そう言っ指で場所を差しながら園子は言った。

「おおきに。」
和葉は笑顔で言った。そして園子はみんなを案内する為に先頭に行き、さつき園子が差した受付の方に歩いていった。その後ろに蘭、和葉もついていった。蘭は園子についていく前に後ろを向き、子供達にこういった。

「皆、ちゃんとついて来てね。」
蘭は笑顔で子供達三人の方を向いて言った。

「はい。」
子供達は元気よく返事をして、蘭達の方へとついていった。そして、蘭は前を向いて歩き始めた。だが、コナン、灰原の事を心配しているせいか、そのとき後ろを振り返っていた園子は、蘭がコナン、灰原の事を心配して顔が笑顔だけど、どこか、表情が曇っていたのに気づいた。

「あのがきんちよの事なら大丈夫だよ。きっと無事に帰ってくるよ。」

「
蘭の曇った顔の表情を読み取ったのか、園子は蘭に笑顔で声をかけた。」

「うん。きっとそうだよな。コナン君達ならコナン君がいるから哀ちゃんも無事に帰ってくるよな。」

そう言ってさっきまでの曇った表情が蘭の顔から消えていった。

7・その後のコナン

一方、コナンの方はというと。

コナンは周りに人があまりいない事を確認すると、時計型麻醉銃を用意し、近くにあつた右の方の路地から回つてジンの背中が見えやすい所に来ていた。そしてジンに麻醉銃を向け、撃ち込んだ。

「あれっ？」

コナンは困惑した顔をした。まあ無理もないだろう。ジンに麻醉針を確実に撃ち込んだつていうのに麻醉が全くジンに効いていないからだ。コナンは麻醉がジンに効かなかった事に少しあたふたしながらも、どうやって灰原を助けようかと考えていた。悩んでから数分が経つたらしく、小五郎が後ろの方から歩いて来た。小五郎は灰原が視界に入っていないらしく、ぶつぶつと何かをつぶやきながら歩いていた。コナンはどうやって灰原を助けるか方法を考えていて、灰原の方にはかり目がいつていたので小五郎が後ろから歩いて来ている事にまだ気づいていなかった。小五郎が後数メートルでジンの所までくるつていう所で、コナンは後ろから歩いてくる小五郎の存在にやっと気づいた。

「やべっ。おっちゃんだ。」

そう言うとコナンは小五郎の方へと走つていった。

「ねえねえ、おじさん。」

コナンはいつもの子供の口調で、笑顔で言った。あたかも何事もなかったかのように。そして、ジン達になるべく気づかれないよう、少し声のトーンを落としていた。

「あん？何だおめえ、何でこんな所にいんだ？蘭達と一緒にじゃねえのか？」

小五郎は左の方にコナンがいるのに気づき、そつちを向いて話した。小五郎はコナンと違い、大きな声でしゃべっていた。

「おじさんに見せたい物があるんだ。こっちに来て。」

コナンは小五郎の言った事を無視し、小五郎の手を引つ張つてさつきコナンが隠れていた左の方の路地に小五郎を連れて行った。

小五郎は（なんだあ？）と思い、面倒くさそうな顔をしながらもコナンに引つ張られるがままについていった。コナンは小五郎の手を引つ張りながら、これからどうしたらいいのかを考えていた。結局、小五郎は前方に灰原がいるのに一切気づかなかった。

コナンは小五郎の手を掴み、さっきいた所まで戻つてくるとその手を離し、そこに止まった。そして、後ろを振り返った。そして少しの間沈黙を作った。そのときコナンは真剣な顔をしていた。あたかも何かをためらっているかのように。そして、コナンは口を開いた。「ご、ごめんね、おじさん。実はおじさんに見せたいものがあったんだ。でもその見せたいもの、何だったか忘れちゃった。あはは。」少しの間、真剣な顔をしていたコナンは左手で頭をかきながら笑い、子供のような顔をした。

「ったく。」

最初、そこについてコナンが小五郎の方を振り返ったとき、コナンの表情が一瞬真剣だったので、小五郎もコナンにつられて真剣な表情をしていたが、コナンが言葉を言い終えた後、小五郎は呆れた顔をした。

「だったらいつまでもこんな所にいねえでさつさとホテルん中入るぞ。蘭達もおめえがないからって心配して探してるだろうしな。」
そういつて小五郎は来た道の方を振り返り、その道を戻ろうとした。

「あつ、おじさん。」

コナンは慌てて歩いていこうとする小五郎を止めた。

「なんだあ？まだ何かあんのか？」

小五郎はジト目でコナンの方を振り返った。

「い、今はその道、通らない方がいいよ。それでこっちから行った方がいいと思って呼んだんだ。実は。」

コナンは小五郎と向き合つて話した後、コナンは路地を奥へと進んで行こうとした。

「おい。おめえ何か隠してねえか？」

路地を進んで行こうとしたコナンを止めて小五郎は真剣になり、コナンに言った。コナンは小五郎の方を振り向き、次の言葉を言った。「べ、別に何も隠してなんかいないよ。あはははは。」

ちよつと焦りながらも子供の口調で言った。「じゃー何でわざわざこんな狭い道を通って杯戸シティホテルに行かなきゃなんねえんだ？その大通りを歩いて行った方が早いだろ。」

小五郎の目はいつにも増して真剣だった。

「じゃーこつちに来てくれたら理由教えてあげるよ。」

コナンは下を向き、眼鏡をキラリと光らせて、尚かつ真剣な口調で言った。

「本当に教えてくれるんだろ？うなあ？」

小五郎は疑いの目をして言った。

「うん。」

そういつてコナンは路地の方を再度振り向き、進んでいった。小五郎もその後をついていった。2カ所角を右に曲がり、次の角を左に曲がれば杯戸シティホテルっていう所の手前、数メートルでコナンは止まった。そして、後ろにいる小五郎の方を振り返った。

「ねえ、おじさん。この角、何があるか見てみて。」

コナンは相変わらず子供の口調で、しかも今回は笑顔で言った。

「あん？この角つて、杯戸シティホテルの角なんじゃねえのか？」
つと言いながらも小五郎はコナンの言った通りにしぶしぶ歩いて見に行こうとした。小五郎はコナンを抜いて角の方へと歩いていった。小五郎がコナンを抜き、コナンは小五郎の方を向いた。小五郎が角の一步手前の所まで来た時、コナンは麻酔銃を構えた。そして、コナンは小五郎に向けて麻酔銃を打った。小五郎はいつものように踊りながら眠り、その場に倒れた。

（ふう。博士にもう一本麻酔針を入れてもらつといて正解だったぜ。やっぱり本当の事はまだおっちゃんにも言えねえや。）

最初、小五郎に言おうかどうかどうしようか考えていた。だが全てが終わるまでは話さないと決め込んでいたので、やはり小五郎にも言うのはやめた。そしてコナンは携帯電話をポケットから取り出し、ある人に電話をかけた。

8・路地

和葉達と別れて外に出て来た服部は、これからどうしようかと迷っていた。なぜなら、服部はコナン、灰原が皆と一緒にいない理由を知っている為、コナン 達の様子を見に行く気はないのだ。

「これからどないしょ。」

服部は困り果てて近くの壁にもたれかかって考えた。少し経った頃、突然ポケットの中にある携帯が震えた。服部は手をポケットの中に突っ込み、携帯の画面を見た。

「おっ、工藤からや。」

やる事がなく途方に暮れていた服部は、すぐさま電話に出た。

「おう、工藤。そっちの様子はどうや？」

電話がかかってきたのがよほど嬉しかったのか、服部は元気に言った。

『なあ、今ホテルから外に出れるか？』

唐突のコナンからの質問だ。

「ああ。つてかもう外出とるでえ。」

相変わらずの口調で服部は答えた。

『今からホテルの隣の路地まできてくれ。』

コナンは余分な事は言わず、なおかつ真剣な口調だった。

「ああ。すぐ行くで待つとれや。」

服部もコナンにつられて真剣な口調になった。顔までもが真剣だった。服部は最後の一言をいい終えた後通話を切り、携帯をポケットの中へと入れた。そして、さっきコナンに言われた杯土シティホテルの隣の路地の方へと歩いていった。服部が辺りを見回したとき、杯土シティホテルの隣の路地は1カ所しかなかったため、どっちの方向へ行けばいいのかすぐに分かった。言われた所の路地を曲がり、コナンを見つけた。

「おう、工藤。調子はどうや？」

服部はいつもの口調で言った。

「全然ダメだ。さつき奴らの後ろから回ってどうやって灰原を助けようか考えたんだけど、いい方法が思い浮かばねえんだ。」

コナンは真剣だった。

「それより何でおっさんがそこにいるんや？」

服部は新たな質問をした。

「服部を呼んだのはおっちゃんの事でなんだ。」

コナンは返事を返した。

「えっ？」

服部は何で 呼ばれたのか分かっていないらしく、困惑していた。

「おっちゃんを杯戸シティホテルの中に連れてって欲しいんだ。」

服部は未だに理解出来ていない。「何で俺がおっさんを連れていかんといかんのや？」と言いたそうな顔をしている。

「後ろからおっちゃんが歩いてきて、灰原を見られたらヤバいと思つてこつちに呼んで眠らせたんだ。」

コナンのこの言葉によって服部はやっと理解できたらしい。

「なんや、そう言う事か。せやったらおっさんが起きたときに工藤とおつたことは知らせん方がええな。」

服部は真剣な顔にだった。

「ああ。じゃー後はおっちゃんの事、頼むな。」

そう言つてコナンは服部に背中を向けた。

「ああ。」

コナンは走つてどこかへ行つてしまった。

「さて、俺もホテルん中戻るとするか。」

そこに取り残された服部は小五郎の腕を自分の肩にまわし、立ち上がった。

9 小五郎、杯戸シティホテルに到着

そこに取り残された服部は小五郎の腕を自分の首の周りにかけ、小五郎を支えながら立ち上がった。そして、さつき来た道の方へと歩いていった。服部は角を曲がり、杯戸シティホテルの中へと入っていった。そしてどこか、小五郎をしばらくの間置いておけるような所を探した。そして見つけた所がトイレの近くの隅である。小五郎をしばらくの間、そこに置いておく事にした。

「ふう。やっと楽になったわ。せやけどこれからどないしたらええんやろ。」

服部はこれからの事に困惑していた。困惑している時に奥の方から和葉がトイレの方に来て、和葉は服部がそこにいる事に気づいた。

「平次、そんな所で何しとんの？」

「あっちゃー。」

和葉にそこにいるのがバレてしまい、右手をおでこにあててしまった。つとつというような表情をして小声で言った。和葉には服部のこの言葉が聞こえていないらしく辺りを見渡していた。そして和葉は、ある人物に目が止まった。

「あれ、そこにおるんおっちゃんやないの？はよ蘭ちゃん所行つたらんとあかんやん、平次。蘭ちゃん、おっちゃんが遅いゆうて心配しとつたんやで。」

そう言つて和葉は小五郎が遅くて蘭が心配しているのは服部のせいやつとでも言っているかのような言い方だった。

「あれ？おっちゃんこんな所で寝とんの？」

この質問に服部はどうしようかと思つたが隠しても隠しきれず、正直に和葉に言つた。

「ああ、そつや。」

服部は次に和葉から言われる事は大体予想できた。なのでその答え

をどのように答えようかを考えながら答えた。

「何でこんな所で寝とんの？」

そう言つて視線が小五郎の方に向いていた和葉は服部の方を見た。

和葉に聞かれるだろうと予想していた質問が見事に 当たっていた。

「た、多分何か物に当たつたんとちゃうか？」

ぎくしゃくしながら服部は答えた。

「ふう〜ん。でもどうするん？パーティー、あと5分も経つたら始まるで。園子ちゃんゆつとつたけどおっちゃんのスピーチ、5番目ぐらいやつて。それまでにおっちゃん起こして会場内におらんとあかんのとちゃう？せやから起こしてあげた方がええんとちゃう？」

和葉は少し服部をせかすような言い方で言った。

「そやなあ。おっさん。おっさん。おーい。おっさん。」

服部は大きい声で揺すぶり、小五郎を起こそうと試みたが小五郎は一向に起きる気配はない。

「こりやダメやわ。こんなに大つきい声だして起こしとんのに一向に起きる気配あらへんなあ（工藤が持つとる麻酔針はどんなに強力なんや）。」

服部は小五郎を起こすのをあきらめた。

「そやね。でも、どうしたらええんやろ。おっちゃんのスピーチ、5番目なんやで。」

小五郎が起きないため、和葉は少し焦り始めた。

「そやなあ。とりあえずは姉ちゃんに言うんが先決ちゃうか。そんなでおっさんのスピーチをもつと後の方にしてみらうとか。」

服部は起きない小五郎に呆れながら次の手段を考えた。

「そやね。じゃー園子ちゃんに知らせてくるよ。」

和葉は慌てて元来た道に戻ろうとした。

「ああ。ほんなら俺はここでおっさん見とくよ。」

「うん。」

そう言つて和葉は走つて行つてしまった。

9・小五郎、杯戸シティホテルに到着（後書き）

こんにちは、ポジティブです。

長らくお待たせしました。やっと続きを投稿しました。

この話の続きを待っていた方々、本当に申し訳ありませんでした。

これからは不定期になると思いますが最後まできちんと投稿していきますと思います。

ニュージールランド旅行の方もこの話が終わってからorこの話に行き詰まったら投稿していこうかなって思っています。

これからもこんな私の駄文をお願いします。

10・コナンの決断

コナンは先ほど小五郎を連れてきた路地の所へと戻ってきた。コナンはこれからどうしようかと考えていた。これからの事を考えながらも灰原は、しゃべりながらもジンに打たれていたので、あまり考えている暇はなかった。

何を思いきや、コナンはサッカーボール射出ベルトでボールを膨らまし、それからキック力増強シューズを使ってジン目がけてボールを思いっきり蹴飛ばした。

だが、ボールがジンの所まで到達する前にジンにボールの存在を気づかれてしまい、ボールめがけて拳銃で撃たれてしまった。

「おい。あそこに誰がいるのか調べてとっちめてこい。」

ジンはいつもの冷静さで、路地の方を見ながらウォツカにそう指示した。

「へい。」

そう返事するとウォツカは拳銃を構えながら路地の方へと歩き出した。

(やべつ。)

ジンの声を何とか聞き取っていたコナンは慌てて角まで走り、身を潜めた。

ぎりぎり身を潜めたときにウォツカが路地の入り口まで来た。もちろん、拳銃を構えたままで。

「兄貴。誰もいやしませんぜ。でも、さっきまでここに誰かがいたのは確かのようにですぜ。ここに足跡が残っていやすよ。足の跡から見て、どうやら大人と子供がいたようですぜ。」

そう言いながらウォツカはジンの元へと戻っていった。

「ふん。どうやらお前には仲間がいるみてえだな。今日の所はお遊びはおしまいにしてやるか。」

ジンは灰原を睨みながら言った。

「ええつ。こいつを手放してもいいんですか。」

ウオツカはこのジンの発言に相当驚いているようだ。なぜなら今まで探していた人なのに、その人をみすみす自分の手で見逃しているからである。

「ああ。こいつをここでやっちまってもいいが、今こいつをやればこいつの仲間とやらを拝めなくなっちまうからな。どうせこいつの仲間も俺たちの事を探ってるだろうから、仲間を探るには今はこいつを生かして後で仲間とともにやった方がいいだろう。」

そう言いながらジンは拳銃をおろして近くに止めてあつた愛車の方へ歩き出した。

「な、なるほど。」

ウオツカはジンの言っている事に納得しながらジンの後を追って車の方へと歩いていった。二人が車の方へ行つたと思うと気が抜けて灰原はその場に倒れてしまった。そして二人は車に乗り込むと車でどこかへ行ってしまった。

二人がどこか、遠くへ行つてしまい、車が見えない事を確認するとコナンは身を潜めていた路地から大通りに出て、灰原のもとへと走っていった。

11・灰原救出

「灰原、大丈夫か？」

コナンが灰原に近づいて、心配そうに声をかけた。

「く、くど……くん。」

灰原はコナンの声を聞いて少し顔を上に上げたが、顔にあんまり力が入らず、すぐに顔を下におろした。

「待ってるよ。今、博士をここに呼んでやったからな。」

そう言つてコナンはポケットの中から携帯を取り出し、博士に電話をかけた。

「博士。俺だけど今から杯戸シティホテルの近くまで来てくれねえか。場所はホテルから二つ目の細い路地だ。頼むな。」

そう言つてコナンは電話の電源を切り、灰原をあげ、おんぶした。

なぜ今の位置から移動するのかと言うと、杯戸シティホテルで鈴木財閥のパーティーがある。今は時間が早いが、博士がここに来るまでに人が通り、灰原のこの状況を見られるかもしれないからだ。ここで誰かに救急車を呼ばれたら救急車の音に蘭達が気づき、心配掛けてしまうと思ひあえて救急車を呼ばず、コナンは博士をここに呼んだのだ。

数分が経ち、コナンと灰原は博士と合流した。

そして、コナンと博士は灰原を連れて博士の車に乗せ、博士の家に向かった。コナンは車に乗ってから服部に電話をかけた。

「おう、服部。おっちゃんの様子はどうか？」

「おー。おっさんやったらもう目が覚めてびんびんしてるで。目が覚めたときに不思議な顔しよったけどお前の事全然気にしよらずに今は皆と一緒に飲んで。」

「そうか。なら良かった。俺ら、そっちには行けねえから蘭達にはうまくごまかしといてくれねえか？」

「こつちに来れへんってどういうこつちや？」

「灰原が傷作つちまってそつちには行けねえってことだよ。傷だらけでそつち行ったら皆に怪しまれるだろ？」

「まー。そりゃそうやな。ほな、適当にごまかしてくわ。」

「おお。サンキュー。あつそれと、今日は博士ん家に泊まってくらそれも伝えといてくれ。」

「おお。」

「じゃー、後は頼んだぞ。」

「ああ。ほんじゃーな。」

そして二人は電話を切った。

11・灰原救出（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

更新が遅くなっています。また更新がいつになるかわかりませんが、次話も読んでいただけたらうれしいです。

12・パーティー会場

ピッ。

服部はコナンとの電話を終え、通話終了ボタンを押した。

会場の外で電話をしていた服部はボタンを押してから会場の、皆が居る所へ歩いていった。

服部は今日のパーティーに子供達を急に参加させる程コナンとくるのを楽しみにしていた。

それなのに当の本人は会場に来れなくなってしまい、服部は残念がっていた。

「平次、どこいっとったん？」

外から入ってくる服部に気づいた和葉は服部に近づいていった。

「電話や、電話。」

服部は面倒くさそうに言った。

「姉ちゃん。今く・・・やのうてコナン君から電話があつてな、行かなあかん所忘れとつたみたいでここには今日来れそうやないみたいやで。ついでに今日、阿笠っちゅうじいさんところで泊まってくゆうてたで。」

「っもう。コナン君つたら。」

先ほどまでコナンの事を心配していた蘭はコナンから連絡があり、少し安心したようだった。

「けどコナンが会場に来ないと思うと少し残念だった。」

「さてと。なんかとつてこようかな。」

コナンが会場に来るのを待っていて、来てから一緒に何か食べようと思っていた服部はまだ何も食べていなかったためお腹が減っていたようでは何かを取りに行った。そこへ和葉が服部についてきた。

「ほんなら私も何か食べようかなあ。平次どうせコナン君と一緒に食べよおもて待ってたんやろ。あたしがかわりに付き合ったるわ。」

むじゃきに和葉はそう言うとお皿を取って食べ物を乗せ始めた。

「えー。コナンの奴、来ねえのかよ。」

チキンを食べながら元太が言う。

「見たいですね。コナン君が来ないとなると灰原さんも来ないかも
しれませんね。」

「えー。哀ちゃんも来ないの？なんかつまないね。」

寂しそうに歩美が言う。

「そうですね。でも二人の事だから何かあったんでしょ。仕方ないですよ。」

子供達もコナン、灰原が来ない事に少し残念そうだったがおいしい食べ物がつさりあり、みんな楽しんでいるようだ。

12・パーティー会場（後書き）

更新遅くなりました。ごめんなさい。

しかも話が短くなってごめんなさい。

文章が短いんで話が分かりにくい部分があるかと思っています。ごめんなさい。

あと少しでこの話も終わります。

もしよろしければ後少しで終わりなので、最後まで読んでください。

13・アガサ邸

コナン、博士は灰原をベッドに寝かせ、二人で今で話していた。

「奴らに灰原の事、ばれちまったな。」

「そうじゃのう。新一、これからどうするんじや？」

「まだわかんねえ。けどどしばらくは灰原を外にださねえようにしねえとな。」

「そうじゃな。新学期入ってからもしばらくは学校を休ませた方が良さそうじゃな。」

「ああ。いつ、どこで奴らが灰原を狙ってるかわかんねえから下手に外に出さない方が良さそうだな。灰原が幼児化しちまった事が奴らにバレちまつてるから探されやすいしな。」

「ああ。学校には始業式の日、高熱でしばらく休むって連絡しといてくれ、博士。」

「ああ。もちろんじゃとも。しかし奴らに哀君の事がバレたとなるとこれから、下手に外出できなくなるのお。」

「ああ。そうだな。でも、ずっと家にこもりっぱなしっていうのもあれだから何か手を打たねえとな。」

「そうじゃのお。じゃがしかし、どこで奴らの目が光ってるかわからないから下手にどこかにいく事が出来んのお。」

「ああ。まー、とりあえず今日の所は灰原が無事で何よりだ。」

ここまで話した所でブザーの音がした。

「邪魔すんで。」

そう言っただけで服部がこのこと家の中に入ってきた。そして勝手に居間の方へ歩き出した。博士は服部の後ろをついていく形だった。

「調子はどうや。」

服部はパーティー中に何があったのかよく分からない為、あっけら

かんとした口調で尋ねた。

「おめえ、よくそんなにのんきだな。奴らが現れたっていうのに。」
コナンは呆れた様子で言った。

「せやかて俺はパーティー中であつた出来事、これっぽっちも知らんのだ。せやから教えてーや。」

服部はまだのんきに聞いてきた。コナンは呆れていたが、これ以上何か言つても突き飛ばされるだけだと思ひ、何か言つのを忘れてこのあらましを説明した。

「そうやつたんか。それで、これからどうするんや。」

「今はまだわかんねえ。だけど今言える事はあんまり灰原を外にださねえようにする事だな。」

「せやけどずーつと家に閉じこもりっぱなしっていうのもよくないんとちゃう？」

「ああ。だけど今はどうしたらいいのか全く分からねえんだ。だから、服部も何かあつたら知恵を貸してくれ。」

「もちろんや。さて。もう今日は夜遅い事やしそろそろ寝よか。」

「ああ。ところでお前、どこに泊まっていくんだ？」

「そやなあ。ここに泊めてもらおかな。」

「おいおい。家主の許可もなく勝手に泊まるきかよ。」

「まあ。そんな堅い事いふなや。今日、ここに泊まつてもええやろ、じいさん。」

「あ、ああ。わしは構わんが。」

「さんきゅー。ほな寝るとするか。」

そう言つて服部は博士の案内により部屋に行き、ついでにコナンも一緒についていき、床についた。

13・アガサ邸（後書き）

更新がすつごく遅くなってごめんなさい><
多分これからも不定期に更新すると思いますが、最後まで読んでくれたらうれしいです。

14・パーティーの翌日

ピンポーン。

朝早く、阿笠博士の家に誰かが尋ねてきた。博士はこんな朝早くから誰だろう?と思いつながら玄関へと急いだ。玄関に近づいた辺りで外からわいわいと明るい声が聞こえてきた。博士は、これは子供達じゃな。っと思いつながら玄関の扉を開けた。だが、博士は驚いた。なぜなら、蘭と和葉もそこにいたからだ。

「みんなしてどうしたんじゃ?」

博士は困惑気味で尋ねた。

「昨日、コナン君と哀ちゃんもパーティーに来なくて、心配で博士ん家来たんだ。さっきコナン君家行ったらコナン君、昨日の夜は博士ん家で泊まったって聞いたから。」

歩美は心配そうに言った。

「そうそう。なんかパーティーの後、平次もここに来たらしいなあ。せやからあたしもこの子らについてきてん。」

和葉も平次が夜に帰ってこなかったせいか、心配そうな顔で言った。「ああ。とりあえず寒いじゃろう。中にでも入らないか?」

博士はどのように皆に伝えていいのか分からず、とりあえず中に入るよう進めた。そして皆はリビングへと通された。

皆がリビングについた頃、音を聞きつけてか、コナンが下に降りてきた。

「あつ、コナン君。おはよう。昨日、どうしたの?大丈夫??」

歩美はコナンに気づくとすぐに挨拶をした。

「ああ。途中から灰原が風邪引いて、パーティーに行くよりも家に帰ってゆっくりした方がいいと思ったからそつちには行かなかったんだ。ごめんね。」

コナンは何事もなかったかの様に話を作り、適当にごまかした。

「そうだったんだ。それなら昨日、そうやって言ってくれれば今日、

ここに来る前にお花買ってきたのにな。」

コナンがまた危ない事に首突っ込んでいるんじゃないかと思った蘭は、ただ灰原が風邪を引いて戻ってきたと聞いて安心した。

そして和やかなひとときが過ぎた。

皆が帰るときに蘭と歩美が灰原に挨拶してから帰るって言っていたがコナンは寝てるかもと言ってそのまま帰るようにした。灰原は昨夜、ジンに拳銃で撃たれていて、まだ傷口が残っているため、皆を灰原に見せたくなかったのだ。

数日がたち、灰原が元気になった所でコナンは探偵事務所に戻った。そしてまた学校が始まり、灰原以外は全て元通りの生活に戻っていた。灰原はというと、組織の人たちから隠れるため、博士の家からあまり外に出ない様になっていた。

14・パーティーの翌日（後書き）

めちゃくちゃな終わり方してすみません。

一応これで完結となります。

更新が長い事遅れましたが、ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2223b/>

クリスマス・イブの日に

2010年10月10日14時05分発行